

清	三国	漢	秦	戦国	春秋	西周	殷
清 鄧石如	魏 正始石經	漢 印	秦 泰山刻石	戰国 石鼓文	春秋 秦公鐘	西周 大克鼎	殷 甲骨文
清 吳謙之	魏 開元石經	漢 瓦當文	秦 嶧山刻石	戰国 中山王鼎	春秋 秦公鐘	西周 史頌盤	殷 金文
清 何紹基	魏 天鏡神識碑		秦 嶧山刻石	戰国 金文	春秋 金文	西周 史頌盤	殷 金文
清 趙之謙							
清 徐夔							
清 吳昌碩							

これは秦隸といって篆書の速書きだよ!

楚帛書

図2 篆書の展開

◆はじめに
今月号と来月号は、いよいよ五つめの書体・篆書を取り上げます。楷書からかけ離れた形をしていますので、隷書よりもなじみにくいですが、特徴を理解すれば幅広い表現を楽しむことができます。

篆書は五つの書体の中で最も古い書体です。現在見ることのできる最古の漢字は、紀元前三〇〇年頃の殷時代晩期に中国で使われていた甲骨文です。次に殷から戦国時代までの青銅器に鑄込まれた金文、戦国末期の大篆を経て、秦時代の小篆へと変遷します。この甲骨文から

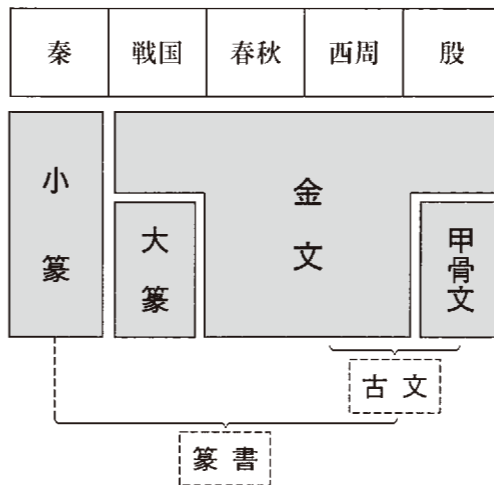


図1 篆書の範囲

【第十一回】「漢字(五体)の基本と書き方」
篆書① 古典の種類と特色

小篆までの四つの書体を総称して篆書といいますが、さらに、狭義の篆書は小篆のみをさすことにもあります。これらの関係を示すと図1のようになります。また、今日では甲骨文と金文を合わせて古文と呼んでいますが、古い資料とは異なりますので注意しましょう。

■篆書の種類

〔甲骨文〕

亀の腹甲や獣骨の裏面に凹みをつくり、そこに火をあててひびの割れぐあいによって、王室の祭祀や狩猟、農作物の豊凶などを占いました。甲骨文はその内容や結果を刻んだものです。鋭利な刃物で刻したため、直線を基調に構成されています。現在までに十万余片が出土、様式によって五期に分けられます。左はI期の甲骨全景です。



H27. 2 月刊「書写書道」



〔金文〕
殷・周時代は、祭壇に供える青銅器が盛んに製作されました。初めは一族のシンボルマークのような図象が中心でしたが、しだいに字数も増え、様式もとどろきました。その用途から鐘(楽器)・鼎(食物を煮炊きする器)・段(食物を盛る器)など数多くの種類がありますが、このような青銅器の銘文を「金文」、それらを代表して「鐘鼎文」ともいいます。「大孟鼎」は高さ1mを越える大型の鼎で、内側に作った経緯が金文によって鑄込まれています。教科書に多く取り上げられている金文には、次ページのように「召尊」、「散氏盤」があります。召尊は西周前期の酒器、散氏盤は散国と隣接国との境界線を確定した協定書が鑄込まれています。盤とは水を入れる器のことです。



「大道不器」新井光風先生 書



「旭日昇天」青山杉雨先生 書



「陶淵明詩句」梅原清山先生 書



カット・橋本綾乃

わが国では明治以降、清朝からの影響で篆・隷書も書かれるようになりますが、急速に広がりを見せるのは戦後になってからです。最上段の写真は、青山杉雨先生（文化勲章受章、一九一〇〜一九九三）の篆書作品「旭日昇天」です。線に細太の変化をつけ、三つの「日」の表情を変えながら絵画のような構成になっています。梅原清山先生の「陶淵明詩句」は篆隷の二書体を混合させて独自の空間を創出、新井光風先生の「大道不器」は戦国期の楚簡の様式をふまえ、右旋回でまき上げる用筆を生かして筆者の幻影を可視化しています。

■篆書の特徴

- ① 最古の書体なので、文字の成立（六書）と合わせるとその構造が理解しやすい。
- ② 小篆は儀礼的で固く窮屈なので日常の書写からは遠のくが、莊重性・威厳性から印章・篆

- ③ 本質的に文字の形や点画の表情は無機的であるが、字画以外には制限要素が少ないので、書造形において表現の自由度は高い。

また、この頃の木簡・竹簡や帛書には当時通行した日常の文字の姿を見ることが出来ます。紀元前二二一年、秦の始皇帝は天下を統一し、各国の文字も大篆をもとに統一し小篆を制定しました。大篆・小篆は文字の大きさの違いだけでなく、親子の関係なのでこう呼んでいます。漢時代以降、篆書は書写から遠ざかり、印章など一部の用途に限られますが、清時代になって金石学の隆盛で、鄧石如をはじめ、呉讓之・趙之謙・呉昌碩らの名家が活躍します。中でも呉昌碩の臨書した「石鼓文」は数多く遺されています。

大篆	秦	馬	齊	楚	韓・趙・魏	燕
古文		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

春秋・戦国時代になると、「王孫遺者鐘」や「中山王罍」など文字の姿に地方色が出て、西の秦国では石鼓文に代表される大篆も現れます。戦国の七雄時代、古い文献では秦国以外の六国で使用していた文字を総称して「古文」と呼んでいます。今日の用法と区別しましょう。

最重要古典 (2回)			最重要古典 (6・5回)		
清	西周	西周	秦	戦国	殷
篆書張茂詩先勳志之(呉讓之)	散氏盤	召尊	泰山刻石	臨石鼓文(呉昌碩) 石鼓文	甲骨文
長脚の縦長字形の小篆で、細く伸びやかな線情に特徴があります。	文字はやや扁平に構え、少し右肩を下げ、草卒な書風で知られています。	「馬」は甲骨文より整理されていますが、銘文には大小の差があり、かなりふぞろいです。	小篆の典型で、字形はより縦長となり裝飾性を高めています。原石は長い歳月を経て、現在は十文字残るだけです。	字形は端正に整理され、横もそろっています。同一の太さで対称的につくられています。清時代の呉昌碩の臨書は少し縦長を強めています。恰好のテキスタイルになっています。	二行目に「車馬」の文字が見えます。「車」は軸が折れています。「馬」はたてがみが写実的に書かれています。

図3 教科書などにみる篆書古典の掲載回数